

娯楽制作物におけるポストモダン要素の検討 日本におけるポストモダン小説の受容の物語構造分析を通して

金子沙織 高田明典

フェリス女学院大学文学部

1. はじめに

アメリカを中心とした国々でポストモダン小説に区別される現代小説が注目されている。カート・ヴォネガット・ジュニア、ジョン・バース、ウラジーミル・ナボコフなどの作家の作品は現在日本においても広く認知されている。ポストモダン小説は物語の虚構性、断片性、意味の多重性、既存表現の模倣、パロディなどの文化的記号の表出の混淆を通して、文学が言語によって事物を表現することの根本的な問題に取り組んできたものと言える。

そのような小説で用いられる表現様式に照らし合わせてみると、日本においても同様に区別されても良い、相似の表現のなされた小説が存在することがわかる。小林恭二、島田雅彦、村上春樹などが該当する。現状では、明確に区別されてはいない。

しかし、明確に区別されずに読者層に受け入れられていることから、通常の「ポストモダン小説」としての物語構造との差異を明らかにする必要がある。日本の現代小説に固有の物語構造を有すると考えられるからである。

あるいは、物語テキストの外部の要因による受容の特殊性も指摘されうる。アメリカにおいては 1960 年代以降、文化的、政治的にかんがりの変動をきたした。伝統を打破していくような変化があり文学への揺さぶりも大きいものであった。加えて、諸領域における技術の著しい発展もあり、自分と世界との関係性の捉え方に大きな変化をもたらしたと考えられる。日本においても同様の変化が見られたことは確かだが人々の社会の変化への受け入れについては異なる様相があるとも考えられる。

今回、分析手法に用いる物語構造分析手法は、物語の訴求構造を抽出することで、その作品の根づいた文化圏の構成員の精神構造との相同性を見出す手続きである。この手続きにより、異なる文化圏における表現物を通して各々の文化構造を比較することも不可能ではない。

ポストモダン小説としての要素を持ちながら、それとして分類されないままに在る日本の現代小説を分析するに際して、物語構造分析手法を用いることは有効であると考えられる。小説の訴求構造を考察し日本におけるポストモダン小説の受容について検討する。

2. 方法および手続き

2.1. 分析対象

以下の小説を選定する。

村上春樹『海辺のカフカ』

島田雅彦『溺れる市民』

トマス・ピンチョン『競売ナンバー49の叫び』

ドナルド・バーセルミ『雪白姫』

作品の選定は、ポストモダン小説としての表現要素を持ち、かつ商業的にも成功している作品を対象とした。特にトマス・ピンチョンの作品は戦後アメリカ文学の最重要作品とされており、ポストモダン小説の様式を特徴付けたものとしても分析の対象とするには最適であると考えられる。

2.2. 分析手法の概要

2.2.1. シーケンス分析

シーケンス分析とは、物語の連鎖パターンを抽出する作業のことを指す。たとえば、

物語 1 : F1 - F2 - F3 - F5 - F8

物語 2 : F1 - F4 - F6 - F7 - F8

という二つの物語構造(話素のシーケンス)が抽出されたときに、

物語 1 : F1 - F2 - F3 - F5 - F8

物語 2 : F1 - F4 - F6 - F7 - F8

と考え、「この二つの物語は、一つの話型(F1-F2-F3-F4-F5-F6-F7-F8)からのバリエーション(派生型)である」という類の分析を行うのが「シーケンス分析」であると言える。もしくは、上記のような物語を複数分析し、その結果として「原形となる話型を同定する」ことが、シーケンス分析の目的となる。クロード・ブレモンは前述の「物語 1」として示したシーケンスが語られた場合に、そこから「物語 1a~1c」として示したような「下位シーケンス」を抽出する方法を検討した。語られたシーケンスとは、映像として直線的に並べられた「視聴者から見た」シーケンスであり、「物語のシーケンス」とは、「その物語に内在されている連鎖」である。たとえば、前の例の「物語 1」は、「映像や小説」のシ

Considerations on Postmodern Factors in
Entertainment Products

Structuralism Analysis on the Reception of
Postmodern Novel in Japan

KANEKO Saori, TAKAD Akinori

Faculty of Letters, Ferris University

Faculty of Global and Inter-cultural Studies, Ferris
University

ーケンスとしては、

物語 1(語られたシーケンス)

: F3 - F1 - F2 - F4 - F8 - F5 - F6 - F7 - F9

となっているかも知れない。小説や映像作品などにおいては、「物語のシーケンス」がそのまま「作品のシーケンス」とはならない場合も多い。このような「語られたシーケンス」から、「物語のシーケンス」を抽出するためには、「上位の(メタな)判断基準が必要となる。ブレモンは、その「上位の基準」として、以下を定置している。

- (1) 行為や事件の可能性を《開く》状況(その潜在的性質が現実化するという条件のもとに)
- (2) その潜在的性質が現実態に移行する(たとえば《可能性を開く》状況に含まれる鼓吹に応える行為をする)
- (3) その行動の終わり、成功あるいは失敗によって発展過程を《閉じる》

たとえば、「語られたシーケンス」が

: A - B - C - D - E - F - G - H - I

であるとすると、以下のように三つのシーケンスが得られることになる。

物語 1a : A - E - H

物語 1b : B - C - I

物語 1c : D - F - G

2.2.2. 話素の抽出および行為項分析

シーケンス分析の結果を受けて、話素の抽出および行為項分析を行う。

行為項分析とは、登場人物を「行為の主体(もしくは意志の主体)」であると捉え、その「行動の目的・役割」を基礎として分析するという手法である。行為項分析自体が、いくつかの下位手順に区別される。下位手順を以下に示す。

- (1) シーケンス分析による結果を、いくつかのシノプシスに書き下す(話素を抽出する)。
- (2) それぞれのシノプシスを、記号表現する。
- (3) 記号表現されたシノプシスの「機能」を同定する。
- (4) 対象を同定する
- (5) 対象の関係を抽出する
- (6) 登場キャラクターの位置付けを同定する
- (7) 登場キャラクターの関係を抽出する
- (8) 対象の暗喩を推定する
- (9) 深層構造を抽出する

3. 結果および考察

今回の分析では、アメリカと日本のポストモダン小説の各物語構造を比較してみて、特別の差異を明らかにすることは出来なかった。

同様に物語構造を同定した前回の研究においては、ポストモダン小説と従来の小説との相違点を指摘した。

その相違点に、(1)シーケンスの空白部分が多い(2)シーケンス要素間のつながりが不明確であるものが存在する、ということをも指摘したのであるが、今回アメリカのポストモダン小説においては日本のそれよりシーケンス

のつながりの不明確さの程度がやや著しいことが分析結果から見受けられた。

今回の研究では、分析対象の作品数が比較検討するには少なかったことから同定した物語構造が類似した作品を意図せず選んでしまった可能性もあり、分析確度が高いものとはいえなくなってしまっていることも懸念される。

今後の研究においては、より多種の作品を扱い分析の確度を向上させたいと考える。

物語構造を比較検討していく研究の積み重ねは、文学・小説の様式を区分していく際に、その区分基準に客観性を持たせることに大きく資するものである。

また、分析手法の問題点や得失について批判検討を加えていくことは、文学・小説作品を分析していく際の科学性を担保することに貢献することになる。

このような研究は特に日本では数多くの研究がなされているとは言い難く、今後の研究成果の蓄積が望まれる。

【参考文献】

村上春樹(著) 『海辺のカフカ』上・下巻
新潮文庫 2005

島田雅彦(著) 『溺れる市民』 河出書房新社 2006

トマス・ピンチョン(著) 志村正雄(訳) 『競売ナンバー49の叫び』 筑摩書房 1992

ドナルド・バーセルミ(著) 柳瀬尚紀(訳) 『雪白姫』
白水社 1990

クロード・ブレモン(著) 阪上脩(訳) 『物語のメッセージ』 審美文庫 1975

A・J・グレマス(著) 赤羽研三(訳) 『意味について』
水声社 1992

高田明典(著) 『ポストモダン再入門』 夏目書房 2005

ラマーン・セルデン(著) 栗原裕(訳) 『ガイドブック
現代文学理論』 大修館書店 1989

マルカム・ブラッドベリ(著) 英米文化学会編訳 『現代
アメリカ小説』 彩流社 1997

三浦玲一(著) 『ポストモダン・バーセルミ - 「小説」
というものの魔法について』 彩流社 2005